



© 2025 "Strangers in Kyoto" Film Partners

Strangers in Kyoto

ぶぶ漬けどうどす

2025, 96 min, English subtitles

Director: TOMINAGA Masanori

Cast: FUKAGAWA Mai, OTOMO Ritsu, ONODERA Zuru, MUROI Shigeru

【ネタバレ注意】

「ぶぶづけどうどす」

この一言が京都のいけずをあらわすようになったのは、いつからだろう。

一昔前には普通に言われていたのかもしれないが、私はこれまで、この一言を言われたことも、言ったこともない。人に聞いても同じような答えが返ってくる。私たちが学生の頃には「ぶぶづけ論議」はよくあった。「そんなこと言うた?」、「いやうちはなかった」、「うちはおばあさんの時にあったと聞いている」、などなど。「でも今はしいひんなあー（今はしないなあ）」で収まるが多かった。（ぶぶづけどうどすは）時分どきに不要な訪問は避けるようにという戒めであるが、今は「いけず」を表現する言葉になってしまっている。婉曲な表現は難しい。

おつたちと15日のあずきのごはん（あずきは厄除け）、8のつく日のあらめ（茹で汁を表にまくと殺菌の効果があるらしい）月末のおから（借金をカラにする）といった日々の献立をあらかじめ決めておく合理性も、食生活の変化によって忘れられつつある。

物語は東京の女性が京都の老舗扇子屋のぼん（息子）と結婚して、京都にやってくるころから始まる。女性には老舗に嫁に来るといふ気負いがちらちらと見え隠れするが、受け入れる扇子屋夫妻は掴みどころがない。特におとうさんははっきりとした物言いをしない（京都のぼんには多い）。おかあさんはというと、これもまた曖昧な表現が多くて、何が本音なのかわからないが、家のことはしっかりと守っている様子。主人公はおかあさんに紹介してもらったおかみさんたちにいろいろな京都のことを聞いてみるが、本音はなかなか出てこないで、結局は振り回されてヘトヘトになってしまう。

京都の人たちのあるあるは、見ていてクスリと笑える。特に洛中洛外の出身者と住まいのくだりである。「京都はどちらですか?」と言う質問はよくある。私は伏見区出身なので、伏見と答えると「あーそうですか」というなんとも微妙な反応（なんや伏見か）をいただく。言葉にはしないけれど「洛中」に対するこだわりが強い。

「京都人」に振り回されながらも主人公はくじけない。彼女には漫画を描くという目的があり（一方で老舗の女将さんになるという目論見もあるので）、様々な出来事がネタになる。少々のことではめげない（というか、ネタとして取り上げる）。ある日、おかあさんの計画がわかり騒動となるが、彼女は古い家を守り続けたいという強い思いで不動産屋と対決してSNSでやりこめてしまう。しかし、おかあさんの思いは全く違う。京都の人は案外先進的で大胆である。おかあさんは古い建物に固執をせず、新しい建物で老舗の歴史を繋ごうと考えている。これも京都にはよくあることで、古いものをなくすことに対する抵抗はあまりない。京都人は新しいもの好きが多い。

まちづくりには「よそ者、若者、馬鹿者」が必要とよく言われる。彼女のような存在が、今の京都を守っているのかもしれないと思わせる映画である。彼女の配偶者である老舗のぼんの存在が全く感じられないのもおかしくも悲しい。

Dates & Venues	Dates may vary
11 February – 20 March Aberystwyth Arts Centre, Aberystwyth	16 February – 2 March Macrobert Arts Centre, Stirling
7 February – 28 March Brewery Arts Cinema, Kendal	6 – 8 February Manchester Film Weekender, Greater Manchester
6 – 12 March Broadway, Nottingham	20 – 26 March Midlands Arts Centre, Birmingham
14 February – 15 March Chapter, Cardiff	9 February – 28 March Phoenix, Leicester
10 February – 23 March Chichester Cinema, Chichester	1 – 31 March Picturehouse @ FACT, Liverpool
1 – 31 March Cinema City Picturehouse, Norwich	5 – 26 March Plymouth Arts Cinema, Plymouth
1 – 31 March City Screen Picturehouse, York	15 February – 29 March QUAD, Derby
23 February – 11 March Depot, Lewes	7 February – 28 March Queen's Film Theatre, Belfast
20 February – 22 March Dundee Contemporary Arts, Dundee	18 – 27 February Riverside Studios, London
7 – 28 March Exeter Phoenix, Exeter	16 February – 26 March Showroom Cinema, Sheffield
12 – 19 March Filmhouse, Edinburgh	8 – 25 February Storyhouse, Chester
7 February – 29 March Firstsite, Colchester	8 February – 15 March The Dukes, Lancaster
12 February – 10 March HOME, Manchester	2 – 26 March The Phoenix Cinema, Kirkwall (Orkney)
8 February – 3 March Hyde Park Picture House, Leeds	10 February – 3 March The Ultimate Picture Palace, Oxford
6 – 15 February Institute of Contemporary Arts (ICA), London	10 February – 30 March Tyneside Cinema, Newcastle upon Tyne
14 February – 28 March Jesus College/ Panorama, Cambridge	16 February – 17 March Warwick Arts Centre, Coventry
6 March – 27 March Leigh Film Factory, Greater Manchester	7 – 17 February Watershed, Bristol

Major Supporter



Sponsors in Kind



Clearspring Pentel

Cultural Partner



この映画を見て思い出したのが、西陣のおばさまたちの集まりである。「いけず」の思い出話をする会で、私もお仲間に入れてもらったが、ひやーと思うことも多々あった。いわく、「いけずはアホにはわからん」…なるほど。「本当のいけずはしばらくしてハッとする（気づく）」…ふむふむ。奥の深いものである。

京都に通い、様々な経験を積むことによってたくましい京都の女性が出来上がったという物語。京都にはそんなふうに取り込んでしまう力が今もあるのなら、まだまだ頑張れる。

小島 富佐江
京町家再生研究会

「いけず」とは、意地悪でにくたらしい様子を表す言葉

Copyright belongs to the Japan Foundation. You may not copy, reproduce, distribute, modify, or distribute any part in any form without permission. Any errata are the responsibility of the Japan Foundation.